

演題番号：8

演題名：山羊の毛包虫症

発表者：○山元朝香 高木祐司 田端亜樹

発表者所属：北部食肉衛生検査所

1. はじめに

毛包虫症は皮膚内部に寄生するニキビダニによる疾病であり、人を含め犬や各家畜に確認されている。今回、山羊のと畜において毛焼き工程時にと体表面から脂肪様白色糸状物が多数突出する事例に遭遇し、皮膚に多数寄生を認める毛包虫症と診断したのでその概要を報告する。

2. 材料及び方法

症例は平成 21 年 4 月 27 日に一般畜として搬入された 24 ヶ月齢、雌の山羊で生体検査で著変を認めず、毛焼き工程時及び解体後検査にて皮膚に異常を認めた。病変部は 10%中性緩衝ホルマリン液で固定後、常法により組織切片を作成し HE 染色を行った。また、寄生虫検査として病変部を直接塗抹後鏡検を行った。

3. 結果

- (1) 肉眼所見：解体後検査において枝肉頭部～腰部の皮膚に直径 3～5mm の黄白色結節状病変が多発していた。筋肉、臓器に著変は認めなかった。
- (2) 組織所見及び寄生虫検査：結節病変部は真皮内にあり、数層の多角形細胞に内張りされた腔内に虫体を多数容れていた。腔内及びその周囲組織に炎症性反応は認めなかった。病変部を直接塗抹後鏡検し、芋虫様の特徴的な形態から毛包虫と特定した。

4. 考察及びまとめ

今回山羊の皮膚に異常を認め、検査結果から山羊の毛包虫症と診断し、本症例では多数の寄生を認めたので皮膚についてほとんど廃棄となった。

本症例は生体検査では異常は認められず、毛焼き工程以降に病変が確認されることからと畜検査において一層注意を払うと共に、作業員に対し情報提供を行い当該病変部の廃棄を徹底する必要がある。

家畜の毛包虫症は、無症状のまま経過することも多いが、寄生により脱毛、落屑を起こしたり、細菌の二次感染を受けて化膿症を起こすものもある。牛や山羊の場合、初期症状として小丘疹や結節がみられ、これらは二次感染によって膿疱、膿瘍となるとの知見もある。本症例は皮膚に結節を認めるものの組織所見で炎症性反応を認めない初期症状の段階と思われる。

わが国での山羊の毛包虫症は文献及び報告例がないため不明な点が多い。今後、同様症例に関するデータを集積し、生体時の症状及び組織所見での炎症性反応の有無、好発時期や県内浸潤状況等を調査、検討する必要があると思われる。